

弁論大会を終えて

学校には、各学校独自の行事や取組があるものです。鶴南特別支援学校五島分校の高等部も例外ではなく、その一つが「弁論大会」です。この取組は、私が教頭として赴任する以前から実施されている恒例行事で、毎年、夏休み前に実施されるこの大会を楽しみにしていました。昨年度は異動に伴い参加できませんでしたが、縁あって、また参加できることを心からうれしく思いました。

生徒たちは弁論大会に向けて「何について書くか」というテーマ選びをします。書きたいテーマが決まったら、国語の時間を使って、「自分の考えをまとめる」「相手に伝わるように」など書き方について考えます。文章がまとまったら、今度は「話す」練習です。相手に伝わる声の大きさ、発声、読む速さ、抑揚、間のとり方、感情を込めて…など、教師に指導を受けながら練習を重ねます。このプロセスこそが生徒たちにとって大切なのです。

弁論大会当日は、教職員だけではなく、生徒も含め全員が審査員となり、お互いの発表に対して点数をつけます。今年は、初めて学校評議員にも審査員として参加していただきました。開始までの時間、席に座って静かに待つ生徒の表情は硬くこわばり、緊張している様子がひしひしと伝わってきました。発表が始まると、今度は友達の発表を「聞く」時間です。自分の番に回ってくる緊張感を持続しながらも、友達の発表を楽しそうに聞く様子が見られました。

弁論大会の楽しみの一つに発表テーマ、いわゆる「題名」の面白さがあります。今年もユニークな題名が目白押しでした。「ぼくのヌンチャク」「競馬は賭けをしなくてもおもしろい」「ゴジラ」…。中には社会問題を取り上げた「少子高齢化」「ゲーム依存症とは」「世の中が平和になるために」という題名もありました。題名を見るだけで「どんな内容だろう?」と、いつも期待させられます。

発表が終わると、すぐに点数の集計を行い、優勝と準優勝、そして特別賞として校長名の入った賞が決まります。優勝者の喜び、選ばれずに悔しさを味わう者など悲喜こもごもではあるものの、生徒たち一人ひとりの表情に共通するのは「笑顔」と「終わった」という安堵感だったような気がします。

私は、教育には「緊張と緩和」が必要だと思っています。「緊張があるから緩和が生きる。緩和があるから、また次の緊張に向かえる」。教育の場は、この繰り返しの中で、児童生徒の挑戦と安心の場を作っていくものではないかと考えるのです。

私は、弁論大会を通して、これまでの努力と「緊張と緩和」の中で更に成長した(していく)生徒たちの姿を見ることができて、本当にうれしくなりました。

